様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０１７１１

研究課題名（和文）日本遺産キリコ祭りのスポーツ人類学的研究

研究課題名（英文）Sports anthropological study of Japanese heritage Kirico Festival

研究代表者
大森　重宜（Oomori, Shigenori）

金沢星稜大学・人間科学部・教授

研究者番号：９０２１３８６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本遺産に認定された能登半島のキリコ祭りを身体運動文化(Physical Arts)と捉え、祭りの華美化・キリコの巨大化の過程を調査し、機能、構造、意義を明らかにすることを目的とした。研究方法は、文献調査、祭主祝詞の調査、各キリコ祭りでのフィールドワークであり、祭りの成立、発展、衰退の過程を歴史、社会的背景、身体性等の観点から検討した。更に他の祭礼ユネスコ無形文化遺産青柏祭の曳山行事等について調査し、過疎化が著しい能登において賑わいが維持されている地域の特性と問題点、衰退、消滅された祭りについて考察した。その結果、キリコ祭りは、祭りの神聖な儀式と高い遊戯性により成立すると推察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
身体は社会的・文化的に作られ、心性は身体に影響される。労働形態の変化による祭りの身体の消失がその心性、さらに社会に及ぼす影響の継続的調査が必要である。限界集落化は地域の象徴としての祭りの形骸化、縮小、中断へと連鎖し、不活宗教法人を生み、最終的に集落の消滅につながる。祭りの継承には厳粛な神事と神賑わい（風流）の両立が重要となる。キリコ祭りの調査継続は、祭が果たす役割についての基礎的データとなる。そして労働と遊びの互酬「結：エー」など祭りによる地域創生のための課題が期待できる。

研究成果の概要（英文）：The Japan heritage Kiriko festivals are a symbolic physical arts in Noto Peninsula. The purpose of this research is to clarify the function, structure and significance of Kiriko festivals by investigating the process of their development. The methods utilized were field work, literature search, and comparative study of priest prayers. We examined the the origin, enlargement, and decline of Kiriko festivals from historical, social, and the techniques of the body. We also researched the UNESCO Intangible Cultural Heritage "Seihaku Float Festival" and nationally designated important intangible cultural property “Okumakabuto Flag Festival”. In Noto, although depopulation is progressing, there are regions where lively festivals are maintained. We considered the structure of the both active and fading festivals. In conclusion, the present study has demonstrates that a combination of solemn rituals and playfulness are important for the inheritance of the Kiriko festivals.

研究分野：スポーツ人類学

キーワード：身体運動文化　キリコ祭　風流　身体技法　地方創生

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)神輿を担ぐ、舁くなど激しい身体活動を行う日本の祭りを身体運動文化（Physical Arts）と捉え、その構造、意味、行動を観察することによりなぜ日本人は神輿などを担ぐのか。祭りの宝庫と称される能登半島の祭りを対象として調査研究を行った。

(2) 能登半島は著しい少子高齢化、限界集落化が著しく進行している。能登は小集落が多く、孤立的ではあるが同質的であり、相互の関係に社会連帯性が強く、宗教的「聖」によって支配され、人々はその社会的規範に従順で強い集落意識によって行動してきた。祭りは人々の連帯と社会の象徴的行為であり、能登において祭りの継承が地域社会の維持活性に果たす役割は非常に大きい。その盛衰が地方創生に果たす役割について考察した。

２．研究の目的

(1)2015 年に日本遺産に認定された「キリコ祭り」、2016 年にユネスコ無形文化遺産に登録された「青柏祭の曳山行事」など能登半島の山車祭りを身体運動文化（Physical Arts）と捉え、祭りの機能、構造、意義、意味、祭りの意味、あるいは祭りの身体技法を明らかとすることを目的とした。

(2)キリコ祭り成立の歴史、社会的背景、祭りの華美化・キリコの巨大化、衰退と消滅の過程を調査することにより、祭りの維持継承と地方創生に果たす役割について考察する。またキリコ祭りの民族誌として記すことを目的とした。

３．研究の方法

キリコ祭に関する文献調査、祭主祝詞の収集と解釈、アンケート調査、また各祭りをフィールドワークにより実態を記録した。主な調査項目は主に以下の 6 項目である。

① 祭りの概要と特徴
② 祭りの起源、伝説、伝播、変遷
③ 地域の産業構造、社会的背景
④ 祭りの組織
⑤ 行事日程と内容
⑥ キリコ祭の祭主祝詞

特に、あばれ祭、七尾祇園祭、中島御涼祭、藤津比古神社納涼祭、藤津比古神社納涼祭水落し神事、塩津納涼祭、燈籠山おすずみ祭、北潟荒御前神社秋祭宵祭、堀松住吉神社綱引祭、須須神社秋例祭、向田火祭の比較を行った。また、能登最大の祭礼、ユネスコ無形文化遺産「青柏祭の曳山行事」、国重要無形文化財「お熊甲の旗竿祭り」について文献調査、フィールドワークを行う事により祭りの宝庫と称される能登半島の祭り文化を研究した。

４．研究成果

(1)「キリコ祭り」の民族誌

キリコ祭りは現在約 200 地区で実施され、キリコの総数は 900 以上にのぼる。キリコ祭りは神輿の御旅所への御神幸の際、キリコ(奉燈)と呼ばれる巨大な御神灯（山車）が氏子たちにより担ぎ出され、神輿の先導、守役、側役として道中を担ぎ、舁く行事である。最大で 2ｔ、 高さ 15m のキリコを 100 人で激しく練り回り、地区同士でその威勢を競い合う。

地域全体の総合的行事として行われる宇出津のキリコ祭、ボランティアアソシエーションの組織化により盛大化している七尾祇園祭、祭りの観光化と維持継承に取り組む石崎奉燈祭、鎮火祭とキリコの関係が特徴的な能登島向田の火祭、社会環境変化、キリコの発生、中断・消滅が見られる堀松綱引祭をその起源、伝説、伝播、変遷などの観点から民族誌として記した。また、キリコ（奉燈）祭の本来の意味と目的を明らかにするため、祭主祝詞を収集して、その内容、キリコの各呼称などを比較検討した。一般的にキリコは「キリコ」または「奉燈」と呼ばれるが、祭主の祝詞では、七尾祇園祭は百千万乃燈、中島御涼祭では大奉燈、藤津比古神社納涼祭は御明、藤津比古神社納涼祭水落神事では大灯小灯乃御明、塩津納涼祭は大灯小灯、燈籠山おすずみ祭は灯籠山、北潟荒御前神社秋祭宵祭は切龍、堀松住吉神社綱引祭は御燈である。

しかし、須須神社秋例祭、向田火祭の祝詞にはキリコが表記されていない。その理由は、多くのキリコを担ぎ出すこと自体が新しい行事であり、明治期以降、能登半島全域に流行した流行りもの、あるいは神事とは別物と捉えられていた。祭りの祭神が神輿で御旅所へ渡御することに対し、キリコはその形態的構造から外来の神々（疫神）の依代（移動式神座）としての機能を持つ。また、神輿を照らす大松明としての役割を持ち、信仰としての神事より若衆らが担ぎ、舁き遊ぶ神賑わいのための祭具なのである。

人口減少に伴う担ぎ手の不足によるキリコ祭りの衰退､中断は集落の消滅のきっかけとなる。この問題を共感、共有し、歴史的に行われてきた他の地域との交流、労働、祭りの互酬「結：エー」を再考することにより地縁、血縁、社縁の再認識と構築が喫緊の課題である。

(2)UNESCO 無形文化遺産「青柏祭の曳山行事：でか山」の民族誌

青柏祭の曳山行事の縁起、神事、青柏祭の伝説について調査した。青柏祭の祝詞および曳山

行事の祝詞を解釈することによりこの祭りの本質を考察した。また、日本最大の山車に変化した理由と曳行技法について検討し、特に専門性の高い梃子衆と木遣り衆について調査を行った。

青柏祭には千年、曳山行事には五百年の歴史的背景がある。更に祭りの組織、変遷、歴史的、社会的背景を検討した結果、青柏祭の曳山行事が神聖性と遊戯性、身体技法の高さが重要であり、伝統継承のキーポイントであった。この祭には意味と機能があり、同時に課題、問題を抱えていた。将来の維持継承には日本の地方社会に共通する人口減少など新たな問題が生じている。青柏祭の曳山行事の継承のための問題は以下の点に集約される。

① でか山は始められた管領畠山家の治世、前田家による復興の時代から政治的意味と機能を持つ。
② 鍛冶町、府中町、魚町の特権的職業集団の祭りによる集団集約は生産性を維持向上させてきた。
③ ギルド的職業集団が消滅した現在は、集団集約の必然性はなくなり、相互影響関係を持つ約縁集団へと変容した。この約縁集団の集約のための動機と機能が今後の課題である。
④ 曳山が日本最大にまで巨大化した藩政期には、「見る－見られる」を意識した観光的祭りの性格を持っていた。
⑤ 見せるための辻回の身体技法・曳行技法が確立されたが、曳山行事の根底にある港湾労働者の身体運動的環境状況が劇的に変わり、日常の「労働：ケ」に立脚する非日常の「祭り：ハレ」といった身体を介した関係が成立しない。
⑥ 歌舞伎が盛んに行われ、人形による歌舞伎舞台が再現されて、聴かせるための木遣りが継承されてきたが、歌舞伎小屋や遊郭などが消滅し、日常の芸能的背景が失われている。
⑦ 山・鉾・屋台行事が衰退する理由の一つは必要以上の華美化による経費の不足であるが、この祭りは、民衆の祭りとして民衆が経費を負担してきたことに継承の鍵があった。しかし現在は公の補助金に依存する比率が高くなりつつあり、それ是とする風潮がある。
⑧ 山車作り、曳行技法などの専門性の高さは人々の動機づけに役立つが、継承の困難度を高めるという両面性を持つ。

(3)能登の祭りと身体

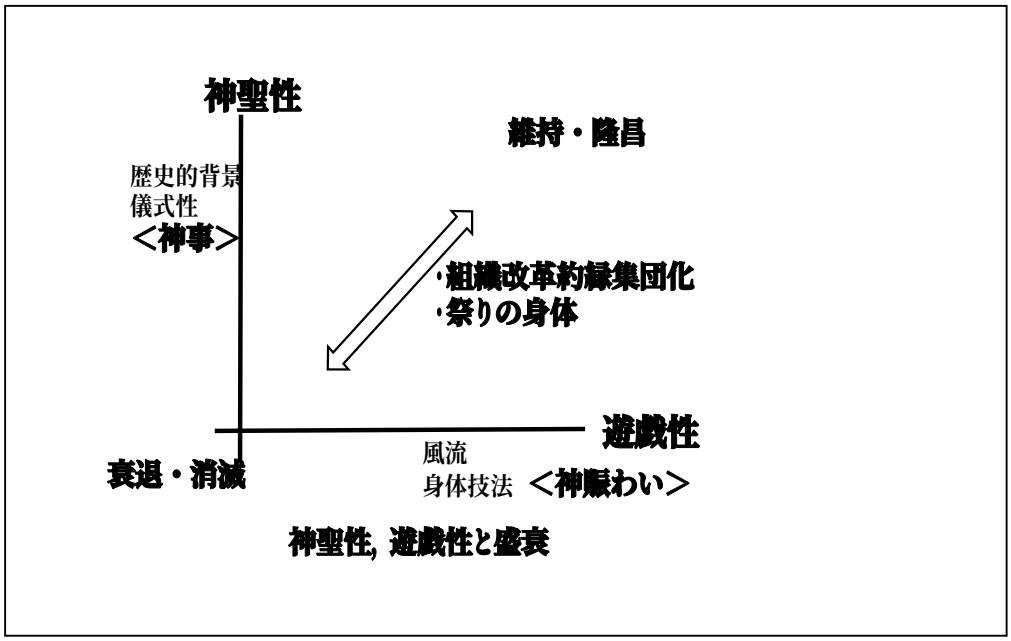
能登では日常（褻）と非日常（晴）の二つの身体の方法が結合した文化の伝統が受け継がれてきた。能登半島の祭りの象徴的行事は、旗竿、作り山（でか山）、キリコである。その特徴は、巨大な山鉾（旗竿、作り山、キリコ）を担ぎ、舁き、曳行することで神々を移動、運搬する身体運動文化にある。でか山の辻回し、キリコ担ぎ、旗竿の島田くずしなど祭りごとに独特の技法が用いられる。

能登の人々は労働、余暇など生活の背景に身体活動が盛んに行われてきた。相撲、番持、芝居が娯楽として行われ、相撲では唐戸山神事相撲をはじめ、七尾、能登部、熊木の角力場所が畠山治世時代より行われてきた。藩政期には、領民の体力練磨の目的に一般民衆に相撲を奨励していた。縁日、祭日には近郷の若衆が集まって対戦し、これを寄合角力、草角力と称して地域が対抗していた。堀松住吉神社の綱引き祭りの相撲などはその名残である。番持は膂力を試すため石や米俵を持ち挙げる競技である。番持は農村男子の体力練磨の方法として奨励されていた。寄合番持が行われ、一石（180 kg）以上の米俵を持ち上げる者も各村々に少なからずいたと記録されている。労働においても能登では勤労を尊び、各自競技的に労役に耐えることを誇りとしていた。この風土は藩政期中ごろには既に存在し、勤労時間は 1 日 13 時間～15 時間、朝食前に 2 時間、昼食までに 4 時間、日没までに 5 時間、夜間 2 時間が通常であり、冬の午後の時間の短縮を夜業で補った。また運搬物は重量 15～20 貫（60 kg～80 kg）、5 斗（90 kg）の米俵が運べなければ一人前と認められなかった。米搗きは 1 日一石を臼つきし、田は堅田で 189 歩（1 歩＝1 坪）、沼田は 300 歩を 1 日で耕した。米俵は 1 日 10 個を編み、割木は 1 日 1 棚を造ることが一人前の男の仕事であった。この労働、遊戯により培われた強靭な労働の身体と身体技法を駆使してキリコを担ぎ出し、巨大な山車を曳行してきた。その機能は地域の集約と自己確認であった。しかし、労働形態の変化は強靭なケの身体を奪い、キリコを担ぎ、舁くというハレの身体も失われつつあり、遊戯性の低下が懸念される。身体は社会的・文化的に作られ、心性は身体に影響される。祭りの身体の消失がその心性に如何に影響するのかについての調査が課題となる。

(4)キリコ祭り継承のための課題

限界集落における不活宗教法人の増加は、地域のシンボル、季節の記憶としての祭りの縮小と集落の消滅を意味する。その現状を追跡記録することが今後の課題として残される。しかし神賑わい（風流：ふりゅう）を維持する祭りも存在し、この状況調査を継続することは究極的限界集落化対策、地方創生のための基礎データとなることが期待できる。また、血縁、地縁、社縁、或いは選択縁とは別の「無縁」の学生などによる祭りへの体験参加も盛んに行われ、ボランティアを受け入れいれる祭りは急増している。特に大人数が必要なキリコ祭りでは、学生の参加が生命線となっている場合もある。キリコ祭りの日本遺産登録は観光資源としてこの「体験型参加者」を促す側面があり、体験参加が本当の成果をあげることが出来るとすれば、一過性の「無縁」から「選択縁」に変わることが出来るか否かであり、究極的選択としてキリコ祭

りの終焉を考えねばならない場合もあると考えられる。
　職業的集団集約が不要となり、アイデンティティの確認機能と相互影響関係を持つ約縁集団へ変容した祭礼組織の維持のためには、非日常的空間と時間を作りだす厳粛な儀式（神事）と遊戯性の高い（神賑わい）の両立が重要である。



５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計２件）
① 大森　重宜　能登半島的切籠和拔河祭：以堀松住吉神社為例 、臺灣身體文化學會雑誌身體文化學報、査読有、第二十六輯、2018、57－106
http://www.airitilibrary.com/Publication/alPublicationJournal
② 大森　重宜　身体運動文化としての「山・鉾・屋台行事」：能登半島における祭のスポーツ人類学的研究 、査読有、早稲田大学博士論文（スポーツ科学）、2019、1－231

〔学会発表〕（計４件）
① 大森　重宜、身体運動文化としての「日本遺産キリコ祭り」、日本スポーツ人類学会第 20 回大会、2019
② 大森　重宜、祭りの身体性と真正性「青柏祭の曳山行事」、日本体育学会第 86 回大会、2017
③ 大森　重宜、綱引き祭りの真正性　―能登半島志賀町堀松住吉神社綱引き祭りの事例― 臺灣身體文化学会 2017 體育政策與休閒觀光國際學術研討會學、2017
④ 大森　重宜、身体文化としての祭り－日本遺産能登のキリコ祭を事例として－、身体運動文化学会、2016

〔図書〕（計２件）
① 山田　孝子、小西　賢吾、大森　重宜、小磯　千尋、Achim Bayer、本康　宏史、James E.Roberson、英明企画編集、祭りから読み解く世界、2018、167（141－156）
② 寒川　恒夫、大森　重宜、ミネルヴァ書房、よくわかるスポーツ人類学、2017、211（174－175）

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：櫻井　貴志
ローマ字氏名：SAKURAI, takashi
所属研究機関名：金沢星稜大学
部局名：人間科学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：10610735

(2)研究分担者
研究分担者氏名：佐々木　達也
ローマ字氏名：SASAKI, tatuya
所属研究機関名：城西大学
部局名：経営学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：30758115

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。